

M. ウェーバーとルサンチマン論  
——ユダヤ教をめぐる——

中澤 平（立命館大学大学院社会学研究科博士課程後期課程）

本報告の目的は、マックス・ウェーバーがニーチェのルサンチマン論についてどのように認識していたのかを明らかにすることにある。

本報告の問題背景にあるのは、ニーチェとウェーバーの共通点と相違点は何であるか、というより大きな問題である。ニーチェとウェーバーとの比較というテーマは、とくに山之内靖氏などによって提起されて以来、ウェーバー研究の一論点として議論されてきた。ところで、ウェーバーがニーチェについて言及する場合、そのほとんどがルサンチマン論に関するものである。したがって、まずなによりもルサンチマン論を焦点にして両者の思想の特質を明らかにし、その上で両者を比較するということが有効であると思われる。そこで、本報告ではとくにウェーバーがルサンチマン論に関してどのように認識していたのかという問題に迫る。

ウェーバーがルサンチマン論に対して言及する場合、一方では宗教倫理全般に一元論的にルサンチマン論を適用することに対しては慎重になり、そうした意図をこめてニーチェに対して批判的に構えているが、他方ではその意義を認め、とくにユダヤ教を分析する際には彼自身ルサンチマン論を適用している。

以上までのことに関しては、先行研究でもある程度確認されていると言えよう（E. Fleischmann(1981)、内田芳明(1968)、山之内靖(1993)、横田理博(1992)(2011)）。本報告ではさらに、ウェーバーがユダヤ教にルサンチマン論を適用したという点について着目し、具体的にはユダヤ教のどういった性格がルサンチマン的だと言えるのか、いつ何故ユダヤ教はルサンチマンを帯びた宗教となったのか、こうした点についてウェーバーがどのように分析していたのかを明らかにする。その際参照するテキストとしては、『経済と社会』の「宗教社会学」、『宗教社会学論集』の「世界宗教の経済倫理」に収められた「序論」「古代ユダヤ教」および「パリサイびと」を予定している。

本報告を通して確認しておきたいことは、まずウェーバーがユダヤ教にルサンチマン論を見出すとき、それはとりわけユダヤ教の苦難の神議論に関してである、ということである。とくに「第二イザヤ」にみられる苦難の神議論においてルサンチマンの影響がみられるとウェーバーはみている。その結果、「第二イザヤ」においては悲惨な状態におかれたユダヤ民族のその悲惨さそれ自体を栄光化する神議論がうまれたわけであるが、それまでの神議論が悲惨な事態を神の罰として考え、決してそれ自体をプラスのものとして評価していなかったことを鑑みれば、「第二イザヤ」の神議論は「価値逆転」した神議論であると言える。こうした「価値逆転」を説明するものとして、ウェーバーはルサンチマン論を適用したのではないかと考えられる。